

MODULAR, HIGH ENERGY, WIDELY-TUNABLE AND ULTRAFAST FIBER SOURCE**Publication number:** JP2002118315 (A)**Publication date:** 2002-04-19**Inventor(s):** FERMANN MARTIN E; GALVANAUSKAS ALMANTAS;
HARTER DONALD J**Applicant(s):** IMRA AMERICA INC**Classification:**

- international: G02B6/02; G02F1/35; G02F1/37; H01S3/06; H01S3/067;
H01S3/10; H01S3/109; H01S3/23; H01S3/30; H01S3/00;
H01S3/094; H01S3/16; G02B6/02; G02F1/35; H01S3/06;
H01S3/10; H01S3/109; H01S3/23; H01S3/30; H01S3/00;
H01S3/094; H01S3/16; (IPC1-7): H01S3/10; G02B6/10;
G02F1/35; G02F1/37; H01S3/06; H01S3/109; H01S3/30

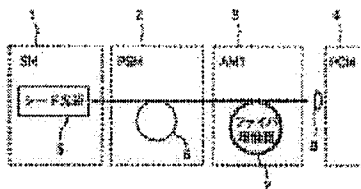
- European: H01S3/067G

Application number: JP20010154396 20010523**Priority number(s):** US20000576772 20000523**Also published as:**

DE10124983 (A1)
US2005111500 (A1)
US7394591 (B2)
US6885683 (B1)
US2008232407 (A1)

Abstract of JP 2002118315 (A)

PROBLEM TO BE SOLVED: To provide a modular, compact and widely-tunable laser system for efficiently generating a high peak ultrashort pulses.
SOLUTION: System compactness is ensured by employing efficient fiber amplifiers, directly or indirectly pumped by diode lasers. Peak power handling capability of the fiber amplifiers is expanded by using optimizing pulse shapes as well as dispersively broadened pulses. Dispersive broadening is introduced by dispersive pulse stretching in the presence of self-phase modulation and gain, resulting in the formation of high-power parabolic pulses. After amplification, the dispersively stretched pulses can be recompressed to nearly band width limit by the implementation of another set of dispersive delay lines. To ensure a wide tunability of the whole system, Raman-shifting of the compact sources of ultrashort pulses in conjunction with frequency-conversion in nonlinear optical crystals can be implemented. Further, a positively dispersing optical amplifier and a Raman amplifier fiber are utilized.



Data supplied from the esp@cenet database — Worldwide

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開2002-118315

(P2002-118315A)

(43) 公開日 平成14年4月19日 (2002.4.19)

(51) Int. Cl. ⁷	識別記号	F I	ページ(参考)
H 0 1 S 3/10		H 0 1 S 3/10	Z 2 H 0 5 0
G 0 2 B 6/10		G 0 2 B 6/10	C 2 K 0 0 2
G 0 2 F 1/35	5 0 1	G 0 2 F 1/35	5 0 1 5 F 0 7 2
1/37		1/37	
H 0 1 S 3/08		H 0 1 S 3/08	B

特許請求 未請求 請求項の数74 OL 外国語出願 (全 78 頁) 最終頁に続く

(21) 出願番号	特願2001-154396(P2001-154396)	(71) 出願人	593185670 イムラ アメリカ インコーポレイテッド アメリカ合衆国 ミシガン州48105 アン アーバー ウッドリッジ・アベニュー1044
(22) 出願日	平成13年5月23日 (2001.5.23)	(72) 発明者	マーテン・イー・ファーマン アメリカ合衆国 ミシガン州 アンアーバ ー レイバイン コート 4931 番地
(31) 優先権主張番号	0 9 / 5 7 6 7 7 2	(72) 発明者	アルマンテス・ガルバナスカス アメリカ合衆国 ミシガン州 アンアーバ ー レイバイン コート 4963 番地
(32) 優先日	平成12年5月23日 (2000.5.23)	(74) 代理人	100081776 弁理士 大川 宏
(33) 優先権主張国	米国 (US)		

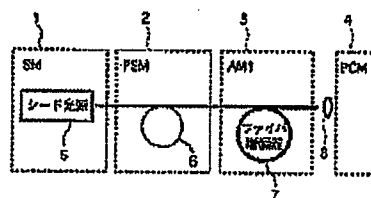
最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 モジュール式、高エネルギー、広波長可変性、超高速、ファイバ光源

(57) 【要約】 (修正有)

【課題】 高ピーク超短パルスを高効率よく発生するモジュール式小型広波長可変レーザーシステムを提供する。

【解決手段】 システムの小型化はダイオードレーザで直接あるいは間接にポンプされた効率のよいファイバ増幅器を採用することで確実に行われる。ファイバ増幅器のピークパワー処理能力は分散的に広がったパルスはもちろんだ。最適化されたパルス形状を使うことで、高められる。分散広がり自己位相変調と利得の存在下で分散パルスが拡張することで導入され、高パワー放物線状パルスの形成をもたらす。増幅後、分散的に広がったパルスは、別のセットの分散遅延ラインを実装することで、バンド幅限界近くまで再圧縮される。全体のシステムの広い波長可変性を確実にするために、非線形光学結晶での周波数変換と合同して超短パルスの小型光源のラマンシフトが実施される。さらに、正分散光増幅器、ラマン増幅器ファイバを利用する。



(2)

特開2002-118315

1

【特許請求の範囲】

【請求項1】0.3nm以上のスペクトルバンド幅と、約50fsと1nsの間のパルス幅とをもつ波長範囲1~1.15 μ mのパルスを発生するシード光源と、該パルスを入力して増幅し、増幅したパルスを出力する広いバンド幅のパルスのためのファイバ増幅器と、該ファイバ増幅器にレーザエネルギーを供給するためのポンプレーザと、を有するレーザシステム。

【請求項2】前記シード光源は、ファイバレーザと、該ファイバレーザの出力を入力するラマンシフトと、該ラマンシフトの出力を周波数変換する非線形結晶と、を有する請求項1に関するレーザシステム。

【請求項3】前記ラマンシフトは、前記ファイバレーザの放射波長を2000nmより長いスペクトル範囲に上方変換するシリカベースのファイバであり、さらに前記非線形結晶は、その後、該上方変換された波長を1000~1500nmのスペクトル範囲に下方変換する、請求項2に関するレーザシステム。

【請求項4】非線形結晶の波長間調曲線は、ラマンシフトの出力の中心波長以下である請求項2に関するレーザシステム。

【請求項5】前記ラマンシフトは、非増幅ファイバ、あるいは屈折率分布と約600~5000nmの波長範囲のパルスを発生するために適定された希土類増幅イオンとをもつ増幅ファイバ、を有する請求項2に関するレーザシステム。

【請求項6】前記シード光源は、Erファイバレーザと、該Erファイバレーザの出力を入力し、前記ファイバ増幅器に出力するシリカラマンシフトファイバと、前記増幅されたパルスを入力するフッ化ラマンシフトと、を有し、前記ファイバ増幅器は、Tmファイバ増幅器である、請求項1に関するレーザシステム。

【請求項7】周波数変換理論を実行するようにフッ化ラマンシフトファイバの出力を入力する非線形結晶をさらに有する請求項6に関するレーザシステム。

【請求項8】前記シード光源は、Erファイバレーザと、周波数変換理論を実行するように該Erファイバの出力を入力する非線形結晶と、該非線形結晶の周波数変換出力を入力するラマンシフトと、を有する請求項1に関するレーザシステム。

【請求項9】前記シード光源は、受動的モードロックファイバレーザであり、前記ラマンシフトファイバは、非線形結晶の周波数変換出力を約750nmから約1050nmの波長範囲にラマンシフトさせるために使用されるホーリファイバである、請求項8に関するレーザシステム。

【請求項10】前記シード光源は、受動的モードロックファイバレーザであり、一連の非増幅ファイバおよび異なる屈折率分布と異なる希土類増幅イオンをもつ増幅ファイバは、前記非線形結晶の周波数変換出力を約750

2

nmから約5000nmの波長範囲にラマンシフトするために使用される、請求項8に関するレーザシステム。

【請求項11】前記シード光源は、受動的モードロックファイバレーザを有する、請求項1に関するレーザシステム。

【請求項12】前記受動的モードロックファイバレーザは、Ybファイバレーザである、請求項11に関するレーザシステム。

【請求項13】前記受動的モードロックファイバレーザは、Ndファイバレーザである、請求項11に関するレーザシステム。

【請求項14】前記受動的モードロックファイバレーザは、多モードである、請求項11に関するレーザシステム。

【請求項15】前記受動的モードロックファイバレーザは、偏光保持である、請求項14に関するレーザシステム。

【請求項16】前記受動的モードロックファイバレーザは、単一モードで偏光保持である、請求項11に関するレーザシステム。

【請求項17】前記シード光源は、ファイバレーザと、該ファイバレーザの出力を入力し反ストークスブルーシフト出力を出力する周波数シフトファイバと、を有する、請求項1に関するレーザシステム。

【請求項18】前記ファイバレーザは、Er、Er/Yb、あるいはTmファイバレーザである、請求項17に関するレーザシステム。

【請求項19】前記シード光源は、前記ファイバ増幅器で放物線状パルスの生成を試みるパルスを発生する、請求項1に関するレーザシステム。

【請求項20】前記シード光源と前記ファイバ増幅器との間にあって、該シード光源を該ファイバ増幅器に結合し、1Km以下の長さの光ファイバをもつ結合器をさらに有する請求項19に関するレーザシステム。

【請求項21】前記ファイバ増幅器の出力に結合された光供給ファイバをさらに有する請求項1に関するレーザシステム。

【請求項22】前記光供給ファイバは、ホーリファイバ、一本の数モードファイバおよび一本あるいは二本の単一モードファイバに接続された一本の数モードファイバからなる群から選択される請求項21に関するレーザシステム。

【請求項23】前記シード光源は、前記ファイバ増幅器で放物線状パルスの生成を試みるように100psより短いパルスを発生し、さらに、前記ファイバ増幅器は、10より大きい利得をもつ、請求項22に関するレーザシステム。

【請求項24】前記シード光源からパルスを受けて該パルスをちょうどよいときに分散的に拡張し、該拡張したパルスを前記増幅器に出力するパルス拡張器をさらに有

(3)

特開2002-118315

3

4

する請求項23に関するレーザシステム。

【請求項25】前記増幅されたパルスを時間的に圧縮するパルス圧縮器を有し、該パルス圧縮器の分散は、該パルス圧縮器がおおよそバンド幅限界パルスを出力するようなものである。請求項24に関するレーザシステム。

【請求項26】前記シード光源は、TmあるいはHoファイバレーザと、該TmあるいはHoファイバレーザの出力を入力し、周波数変換論を実行する非線形結晶と、を有する請求項1に関するレーザシステム。

【請求項27】前記ファイバ増幅器は、YbあるいはNdのどちらかが添加される請求項1に関するレーザシステム。

【請求項28】増幅されたパルスをおおよそバンド幅限界まで時間的に圧縮するためのパルス圧縮器を、さらに有する請求項1に関するレーザシステム。

【請求項29】前記シード光源は、直接変調された半導体レーザである請求項1に関するレーザシステム。

【請求項30】0.3nmより大きいスペクトルバンド幅と約50fsと1nsの間のパルス幅とをもつ1~

1.15μmの波長範囲のパルスを発生するシード光源と、該パルスを受けて該パルスをちょうどよいときに分散的に拡張し、該拡張したパルスを出力するパルス拡張器と、広いバンド幅のパルスに対して10より大きな利得をもち、該拡張したパルスを受けて増幅しかつ出力するクラッドポンプファイバ増幅器と、該増幅され拡張されたパルスを入力し、それらをおおよそバンド幅限界まで時間的に圧縮するパルス圧縮器と、を有するレーザシステム。

【請求項31】前記パルス拡張器は、1km以下の長さのファイバを有する請求項30に関するレーザシステム。

【請求項32】前記パルス拡張器は、ホリファイバを有する請求項30に関するレーザシステム。

【請求項33】前記パルス拡張器は、一本の少数モードファイバを有する請求項30に関するレーザシステム。

【請求項34】前記パルス拡張器は、一本あるいは多数の単一モードファイバと一緒に接合された一本の少数モードファイバを有する請求項30に関するレーザシステム。

【請求項35】前記パルス拡張器は、1km以下の長さの単一モードファイバを有する請求項30に関するレーザシステム。

【請求項36】前記パルス拡張器は、W状屈折率プロファイルをもつファイバを有する請求項30に関するレーザシステム。

【請求項37】前記パルス拡張器は、多クラッド屈折率プロファイルをもつファイバを有する請求項30に関するレーザシステム。

【請求項38】前記パルス拡張器は、負の3次分散をもつ一本のファイバと、負の2次分散をもつ線形チャープ

ファイバ回折格子と、を有する請求項30に関するレーザシステム。

【請求項39】前記パルス拡張器は、微形チャープファイバ回折格子と、パルス圧縮手段で高次分散を補償するように、3次および高次分散の選択できる値をもつ一つあるいはより多くのファイバ透過型回折格子と、を有する請求項30に関するレーザシステム。

【請求項40】前記パルス拡張器と前記パルス圧縮器の間に接続された複数の付加的ファイバ増幅器と、1km以下の長さの光ファイバを有し、前記シード光源を該複数の付加的増幅器の最初の一つに結合するファイバ結合器と、該ファイバ増幅器の前、該複数の付加的ファイバ増幅器の後、あるいは該増幅器のどれかの中間、のいずれかに配置された複数のパルス採集手段と、をさらに有する請求項30に関するレーザシステム。

【請求項41】0.3nmより大きいスペクトルバンド幅と約50fsと1nsの間のパルス幅とをもつ1~1.15μmの波長範囲のパルスを発生するシード光源と、少なくとも一つの前方バスと一つの後方バスで動作する増幅器であって、該パルスを受けて増幅し、出力する、広いバンド幅のパルスためのクラッドポンプファイバ増幅器と、該ファイバ増幅器にレーザエネルギーを供給するためのポンプレーザと、該増幅器の一つの前方バスと一つの後方バスの間に配置された光変調器と、を有するレーザシステム。

【請求項42】複数の付加的ファイバ増幅器と、ここで少なくとも一つおよび複数の付加的ファイバ増幅器は、少なくとも一つの前方バスと一つの後方バスで動作する。少なくとも一つの前方バスと一つの後方バスで動作する前記の少なくとも一つのファイバ増幅器と複数の付加的ファイバ増幅器の最初のバスの後に配置された増幅器の基本モードを優先的に透過するモードフィルタと、をさらに有する請求項41に関するレーザシステム。

【請求項43】少なくとも一つの前方バスと一つの後方バスの間に配置された一つのパルス採集器を、さらに有する請求項42に関するレーザシステム。

【請求項44】2μmより大きな出力波長で動作するパルス光源であって、短パルス幅のパルスを出力するシード光源と、該パルスを入力し、該出力波長を生成する第一ファイバラマンシフタと、を有するパルス光源。

【請求項45】前記第一ファイバラマンシフタに接続された少なくとも一つの付加的ファイバラマンシフタと、該ファイバラマンシフタの間にかわるかわる接続された複数のファイバ増幅器と、をさらに有する請求項44に関するパルス光源。

【請求項46】前記ファイバラマンシフタの最後の一つに接続された通信結晶をさらに有する請求項45に関するパルス光源であって、該非線形結晶の波長間調曲線が、ラマンシフトされ増幅されたシードパルスのラマンスペクトル成分の中心波長以下に選定されるパルス光

5

源。

【請求項47】受動型モードロックファイバレーザと、該ファイバレーザの出力を増幅するためのYb増幅器と、を有する光パルス光源。

【請求項48】前記受動型モードロックファイバレーザは、Ybファイバレーザを有する請求項47に関する光パルス光源。

【請求項49】10 dB/km以下の利得と10 dB以上の総合利得をもつ光ファイバ透過ラインに接続された純粋正分散ファイバ増幅器と、該光ファイバ透過ラインに配置された分散補償素子と、該光ファイバ透過ラインに配置された光学フィルタと、を有する光通信サブシステム。

【請求項50】3 dB/km以下の利得と20 dB以上の総合利得をもつ光ファイバ透過ラインに接続された純粋正分散ファイバ増幅器と、光ファイバ透過ラインの一端に配置された分散補償素子と、を有する光通信サブシステム。

【請求項51】光ファイバ透過ラインに接続された正分散光ファイバ素子と、光ファイバ透過ラインにやはり接続された光負分散素子と、を有する光通信サブシステムであって、該光ファイバ透過ラインを通過する光パルスで受けた自己位相変調の量は、光負分散素子でよりも正分散光ファイバ素子の方が大きい、光通信サブシステム。

【請求項52】前記負分散素子は、チャープファイバ回折格子を有する請求項51に列挙された光通信サブシステム。

【請求項53】光ファイバ透過ラインに接続された純粋正分散をもつ複数のホーリファイバと、光ファイバ透過ラインにやはり接続された複数の光負分散素子と、を有する光通信サブシステムであって、光ファイバ透過ラインを通過する光パルスで受けた自己位相変調の量は、光負分散素子でよりもホーリファイバの方が大きい、光通信サブシステム。

【請求項54】10 ns以下の長さをもつポンプパルス列を入力し、光信号も入力し、増幅し、出力する光ラマン増幅器ファイバを有する光通信サブシステムであって、該光信号は、該ラマン増幅器ファイバをポンプパルスに関して反対方向に伝搬する、光通信サブシステム。

【請求項55】前記光ラマン増幅器は、前記ポンプパルスに実施される同期操作で同調される、請求項54に関する光通信サブシステム。

【請求項56】光パルスを出力するシード光源と、該光パルスを変調する変調器と、該変調された光パルスを入力するラマンシフトファイバと、該ラマンシフトファイバの出力を入力するラマン増幅器と、を有する請求項55に関する光通信サブシステム。

【請求項57】前記同期操作は、前記シードパルスが前記ラマンシフトファイバに注入されるまでに、該シード

(4)

特開2002-118315

6

パルスのパワー、波長および幅の少なくとも一つを変調することを含む、請求項56に関する光通信サブシステム。

【請求項58】前記ラマンシフトファイバは、分散がある意味で前記ラマンシフトを最適化するように波長で変化するホーリファイバである、請求項9に関するレーザシステム。

【請求項59】シードパルスの光源と、該シードパルスを入力し増幅するファイバ増幅器と、を有するレーザシステムであって、該ファイバ増幅器で作られたパルスが放物線状であるように、該シードパルスは発生させられ、該ファイバ増幅器は、形作られる、レーザシステム。

【請求項60】シードパルスの光源と、該シードパルスを入力し増幅し、増幅されたパルスを出力するファイバ増幅器と、を有するレーザシステムであって、そのシード光源は、該ファイバ増幅器で放物線状パルスの形成を誘起するパルスを発生する、レーザシステム。

【請求項61】シードパルスの光源と、該シードパルスを入力し増幅し、且つ増幅したパルスを出力するファイバ増幅器と、を有するレーザシステムであって、該ファイバ増幅器で作られたパルスが放物線状であるように、該シードパルスは発生させられ、該ファイバ増幅器は、形作られる、レーザシステム。

【請求項62】異なる波長の光パルスの光源と、該異なる波長の各々で経験したラマンシフトの度合いを動的に修正する手段と、を有する光通信サブシステム。

【請求項63】異なる波長の光信号を送送するファイバ光送器と少なくとも一つのファイバレーザ増幅器とを有するタイプの光通信システムにおける、該異なる波長の信号に異なる利得を課する少なくとも一つのラマンシフトを有する改良。

【請求項64】パルス出力を発生するファイバレーザと、該ファイバレーザのパルス出力を入力するラマンシフトと、該ラマンシフトの出力を周波数変倍する非線形結晶と、を有するレーザシステムのためのシード光源。

【請求項65】前記非線形結晶は、PPLN、PPRiチウムタンタレート、PP MgO:LiNbO₃、PP KTPからなる群から選ばれた周期的にボールした強電性光学材料と、KTP異種同形体の周期的にボールした結晶とを有する請求項64に請求されたシード光源。

【請求項66】請求項65に請求されたシード光源であって、前記非線形結晶の区間は、該シード光源のパルス出力のパルス長さを制御するために選定される、シード光源。

【請求項67】前記非線形結晶の出力波長は、該非線形結晶の温度を制御することによって制御される、請求項65に請求されたシード光源。

【請求項68】供給ファイバと、回折格子型パルス圧縮器と、該パルス圧縮器の3次分散を補償するためのW-

(5)

特開2002-118315

7

8

ファイバと、を有する放物線状パルス体制で動作するファイバレーザシステム用供給システム。

【請求項69】放物線状パルス体制で動作するファイバレーザ増幅システム用分散補償配列であって、該システムの増幅器段の前に配置され、少なくとも一つの負の3次分散生成素子を含むパルス拡張器と、該拡張器で導入された分散を取り消す正の3次分散をもち、2次分散を補償するために該増幅器段の後に配置されたパルス圧縮器とを有する分散補償配列。

【請求項70】放物線状パルス体制で動作するファイバレーザ増幅システム用分散補償配列であって、該システムの増幅器段の前に配置され、少なくとも一つの正の2次分散生成素子と3次と4次分散を生成するための少なくとも一つのブラッグファイバ回折格子およびファイバ透過回折格子を含むパルス並列器と、該拡張器で導入された分散を取り消す正の3次分散をもち、2次分散を補償するために該増幅器段の後に配置されたパルス圧縮器とを有する分散補償配列。

【請求項71】フェムト秒体制シードパルスの光源と、ポンパルスを形成するために該シードパルスを受けて波長シフトするラマンシフトファイバと、該ポンパルスと反対方向に伝搬する複数の信号波長パルスを注入されたラマン増幅器ファイバと、該ポンパルスを波長同調するため、該ラマン増幅器のラマン利得の中心波長を同調するために、該シードパルスのパワー、波長、幅の少なくとも一つを変調する手段と、を有する波長可変ラマン増幅器。

【請求項72】請求項71に請求された増幅器であって、前記ポンパルスは、前記信号パルスを有効な修正ラマン利得スペクトルに合わせるように、該ラマン増幅器の信号パルス横断時間以下の時間周期で波長同調される、増幅器。

【請求項73】1ナノ秒以下のパルス幅をもつパルス出力を発生するファイバレーザと、分散が、幾分か波長同調を最適化するように波長で変化するホーリファイバと、を有する波長可変レーザシステム。

【請求項74】パルス出力を発生するファイバレーザと、分散が、幾分か波長同調を最適化するように波長で変化するホーリファイバと、を有する波長可変レーザシステムであって、波長同調範囲内で、該ホーリファイバは、負の2次分散を示し、波長300nm以内で入力パルス光源に対し2次分散ゼロをもち、シリカの3次材料分散の絶対値に等しい絶対値あるいはそれ以下の3次分散を示す、波長可変レーザシステム。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の背景】1. 発明の分野

この発明は、波長選択ができ、コンパクトで、モジュール式で、かつ効率的な高パワー超短レーザパルス光源に関し、この超短レーザパルス光源は、超高速レーザ技術

の工業使用における基本的な構成要素である。

【0002】2. 関連技術の記述

ファイバレーザは、これまで長い間、超短パルス発生用の有効な媒体を与えると認識されてきた。しかしながら、これまで、そのようなシステムは、主に、波長可変性に対して制限されたオプションをもち、かつ最小の達成可能パルス幅に限界がある、動的に波長がシフトした（チャープした）ブラッグ回折格子を使用した瞬時周波数が変化するパルス（チャープしたパルス）増幅に基づいていた（A. Galvanauskas and M.E. Fermann, 'Optical Pulse Amplification using Chirped Bragg Gratings', United States Patent, No. 5,499,134）。チャープしたブラッグ回折格子は、実に広く入手できるデバイスに発達してきた。そして、ブラッグ回折格子内のチャープは、線形に、あるいはチャープパルス増幅システム内での任意のオーダの分散を補償するために、非線形に、さえもデザインされる（A. Galvanauskas et al., 'Hybrid Short-Pulse Amplifiers with Phase-Mismatch Compensated Pulse Stretchers and Compressors', U.S. Patent No. 5,847,863）。このチャープパルス増幅システムは、バンド幅制限パルス、すなわち、与えられたスペクトルのパルスバンド幅にとって最も短くできるパルス、の発生に重要である。

【0003】光ファイバのパワーとエネルギーの限界を最大化するために、チャープパルス増幅を使用することは、明らかに望ましいが、同時に、システム集積化の要求（ブラッグ回折格子は、最も高い可能な分散を与えるために、透過よりむしろ反射で動作する必要がある）は、そのような標準的なチャープパルス増幅システムの使用を演出する。チャープパルス増幅の代わりとして、多モードファイバ増幅器での高パワーパルス増幅が提案された（M. E. Fermann and D. Harter, 'Single-mode Amplifiers and Compressors Based on Multi-mode Optical Fibers', United States Patent, No. 5,818,630）。またチャープパルス増幅の代わりとして、ファイバ増幅器でのソリトンラマン圧縮を使用することや、あるいは、一般的に、非線形ファイバ増幅器中でのパルス圧縮を使用することが提案された（M.E. Fermann, A. Galvanauskas and D. Harter, 'Apparatus and Method for the Generation of High-power Femtosecond Pulses from a Fiber Amplifier', United States Patent, No. 5,880,877）。

【0004】明らかに、多モードファイバの使用は、そのようなシステムの性能をさらに改善するために、チャープパルス増幅およびソリトンラマン圧縮と結合される。しかしながら、今日まで、全体のシステム性能をさらに最適化するためのパルス形状制御法は、全然記述されなかった。同じく、そのようなチャープパルス増幅システムの拡張器部分に自己一位相変調を使用することは、提案されていなかった。

【0005】さらに、システムのコンパクト化と高エネ

9

ルギ化の析要素として、バルク光学圧縮器と台同してファイバ分散遅延ラインを使用することは、有利であり、少なくとも、高エネルギーファイバレーザシステムの部分的な集積化をもたらす (M.E.Fermann A.Galvanuskas and D.Harter: 'All fiber source of 100 nJ sub-picosecond pulse', Appl. Phys. Lett., vol. 64, 1994, pp. 1315-1317)。しかしながら、今日まで、バンド幅限界近くまでパルスを増圧縮するために、拡張器と圧縮器の組合せの中で、より高次の3次および4次分散を制御する有効な方法は、全然開発されなかった。

【0008】チャープパルス増幅の代わりとして、高利得正分散 (非ソリトンを持続させる) シリカーベースの単一モードエルビウム増幅器をバルクプリズム圧縮器と組み合わせて使用することにより、有効なパルス圧縮が得られるということも以前に提案された (K.Tamura and M.Nakazawa, 'Pulse Compression by Nonlinear Pulse Evolution with Reduced Optical Wave Breaking in Erbium-Doped Fiber Amplifiers', Opt. Lett., Vol. 21, p. 68 (1996))。しかしながら、この技術シリカーベースのエルビウム増幅器と台同して使用することは、問題である。なぜなら、正分散のための要求がファイバコアサイズを約5ミクロンに制限するか、さもなければ、負の材料分散が、正の導波路分散を支配し、全体を食のファイバ分散にするからである。同様に、シリカーベースの多モードファイバは、エルビウム増幅器波長で負の分散をもち、有効なパルス圧縮のためにそれらを使用することを妨げている。このように、正分散エルビウム増幅器の限定されたコアサイズは、達成可能なパルスエネルギーを大きく減少させる。

【0007】さらに、一つのエルビウム増幅器の後で付加的なスペクトル拡大やパルス増幅を行う方法は、田村らによって示されなかった。同様に、エルビウム増幅器の分散を補償するためにプリズムパルス圧縮器の性能を最適化させる方法は、田村らによって教示されなかった。

【0008】チャープパルス増幅の別の代わりとして、非増幅光ファイバをバルク回折格子圧縮器と台同して使用することが提案された (D.Grischkowsky et al. and J.Kafka et al., U.S. Patent No. 4,750,809)。しかしながら、そのようなシステムには利得がないので、高パルスエネルギーが、高出力パワーを得るために非線形光学素子に結合されなければならない、システムのピークパワー特性を低下させる。さらに、そのような光学配置で、より高次の分散を補償する方法は議論されておらず、このアプローチの実現性を大きく制限している。さらに、そのようなシステムへの入力でのパルス形状を制御することなしで、線形チャープをもつスペクトル広がりば、非常に限定された入力パワーでのみ得られる。入力パルス形状の制御は、Kafkaらによって議論されなかった。同様に、バルク回折格子圧縮器と台同して最も短い可能な

(6)

特開2002-118315

10

パルスを得るために、そのような非線形光学素子における2次および3次分散制御が、必要とされるが、これもKafkaらによって議論されなかった。

【0009】別の (分散-補償) 導波路素子中に色分散を使用しての (低パワー) 光波信号中の色分散補償は、電気通信システムの性能を最適化するために導入された (C.D.Poole, 'Apparatus of compensating chromatic dispersion in optical fibers', US Patent No. 5,185,827)。しかしながら、高パワーパルス光源の場合、分散-補償導波路素子によって導入される自己一位相変調は、それらの有効な使用を妨げる。さらに、Pooleによって議論されたシステムは、分散-補償導波路素子中で高次モードを選択的に吸収するため、あるいは、分散-補償導波路素子中で基本モードを選択的に増幅するために、モード変換器および、あるいは希土類添加ファイバと台同して動作するだけである。自己一位相変調の存在下での高パワー光パルスの分散を補償する方法は、何ら教示されなかった、また、モード変換器なしの分散-補償導波路を実施する方法は、何ら提案されなかった。

【0010】モード変換器と高次モードを使用する代わりとして、W-スタイルの屈折率プロファイルをもつファイバが知られている (B.J.Ainslie and C.R.Day, 'A review of single-mode fibers with modified dispersion characteristics', J. Lightwave Technol., vol. LT-4, No. 8, pp. 967-979, 1988)。しかしながら、高パワーファイバチャープパルス増幅システムへの、そのようなファイバデザインの使用は、議論されたことがなかった。

【0011】超高速ファイバ増幅器の効率を最大にするために、Ybファイバ増幅器の使用が提案された (D.T. Walton, J.Nees and G.Mourou, 'Broad-bandwidth pulse amplification to the 10¹⁴ level in an ytterbium-doped germanosilicate fiber', Opt. Lett., vol. 21, no. 14, pp. 1061 (1996))。しかしながら、Waltonらによる研究は、信号パルスの光源としてモードロックTi:サファイアレーザを採用するばかりでなく、Yb添加ファイバの励起にアルゴンレーザポンプTi:サファイアレーザを採用したが、これは、非常に効率が悪く、且つ明らかに小型装置と両立しない。さらに、増幅過程で光パルスの位相を制御する方法は、何ら提案されなかった、すなわち、Ti:サファイアレーザからの100 fsパルスが、1.6 kmの長さの単一モードファイバ分散遅延ラインを通してYb増幅器に結合されたが、この遅延ラインは、システムを超高速増幅に適用することを大きく制限する高次分散による大きな位相歪みを起こす。それよりは、Yb増幅器中で高品質高パワー放物線状パルスを誘起するためには、200-400 fsの範囲のシードパルスが2.3 mの長さのYb増幅器には好ましい、Waltonらによる単一モードYb添加ファイバ増幅器

11

の使用は、Yb増幅器のエネルギーとパワーの限界をさらに大きく制限する。多モードYb添加ファイバの使用は、内容がここに参考文献として組み入れられた米国出願No. 09/317,221に提案されたが、Yb増幅器と両立する小型超短パルス光源は、わかりにくいまま残った。

【0012】能動的な光変調機構に組み入れられる広可変パルスYb-ファイバレーザが、最近記述された(J. Porta et al., 'Environmentally stable picosecond yttrium fiber laser with a broad tuning range', Opt. Lett., vol.23, pp.615-617(1998))。このファイバレーザは、おおよそYbの利得バンド幅内の同調範囲を設けているが、そのレーザを超高速光学に適用することは、そのレーザで発生される比較的長いパルスにより制限される。一般的に能動モードロックレーザは、受動モードロックレーザより長いパルスを発生し、この現状のケースでは、発生したパルスのバンド幅は、5 psの最小パルス幅をもち、0.25 nmである。

【0013】非線形結晶中での周波数変換と台同してラマンシフトを使った広波長可変ファイバレーザ光源が、最近記述された。(M.E.Fermann et al., US Patent No.5,880,877 and N.Nishizawa and T.Goto, "Simultaneous Generation of Wavelength Tunable Two-Colored Femtosecond Soliton Pulses Using Optical Fibers," Photonics Techn.Lett., vol.11, no.4, pp421-423参照)。基本的に、空間的に不変なラマンシフトが提案され、その結果、波長可変範囲は300-400 nmに制限される(Nishizawa et al.参照)。さらに、ラマンシフトの継続する応用や、非線形光学結晶での非線形周波数変換に基づく高度な非線形システムのノイズを最小にする方法は、何も知られていない。さらに、西沢らによって記述されたシステムは、ラマンシフトをシードするための付加的偏光制御エルビウムファイバ増幅器で増幅された比較的複雑な低パワー偏光制御エルビウムファイバ発振器につながった。さらに、Erファイバレーザからの周波数通信出力のラマンシフトを可能にする方法は、何も記述されていない。

【0014】高パワーファイバ発振器からのパルスで、あるいは、高パワーファイバ発振器からの周波数変換されたパルスで、直接シードされたラマンシフトが明らかに好ましい。そのようなファイバ発振器は、最近多モード光ファイバを使って記述された(M.E.Fermann, 'Technique for mode-locking of multi-mode fibers and the construction of compact high-power fiber laser pulse sources', U.S. serial number 09/199,728)。しかしながら、ラマンシフトをその後使用したような発振器の周波数を変換する方法は、今日まで論証されたことがない。

【0015】

【発明の要旨】したがって、本発明の目的は、モジュール

(7)

特開2002-118315

12

ル化しやすく、小型、広波長可変、高ピーク、高平均パワー、低ノイズ超高速ファイバ増幅レーザシステムを提供することである。

【0016】1)短パルスシード光源、2)広バンド幅ファイバ増幅器、3)分散短パルス拡張素子、4)分散パルス圧縮素子、5)非線形周波数変換素子、6)ファイバ分配用光学部品、のような様々な容易に交換できる光学系を使用することで、システムのモジュール化を確実に行うことが、発明の別の目的である。さらに、提案された任意のモジュールは、交換できる光学系の下位セットに構成され得る。

【0017】高度に集積化された分散遅延ラインも、ダイオードレーザで直接あるいは間接にポンプされた有効なファイバ増幅器も、使用することで、システムの小型化を確実に行うことが、発明の別の目的である。ファイバ増幅器の高ピークパワー特性は、放物線状あるいは他の最適化されたパルス形状を使うことで、大きく拡大される。自己位相変調と台同して、放物線状パルスは、大バンド幅、高ピークパワーパルスの発生も、良く制御された分散パルス拡張も、可能にする。高パワー放物線状パルスは、ファイバの材料分散が正である波長で動作する高利得の準一あるいは多モードファイバ増幅器で発生される。

【0018】放物線状パルスは、自己位相変調あるいは一時的なカー効果型光学非線形性の存在下でも相当なファイバ長に沿って分配されるかあるいは伝搬され、十分に線形なパルスチャープを招く。そのようなファイバ分配あるいはファイバ伝搬ラインの端部で、パルスは、おおよそバンド幅限界まで圧縮される。

【0019】さらに、ファイバ増幅器の高エネルギー特性は、放物線状パルスあるいは他の最適なパルス形状と台同してチャープパルス増幅を使用することで大きく拡大され、そのパルス形状は、パルス品質の劣化なしに沢山の自己位相変調を可能にする。より高度に集積化されたチャープパルス増幅システムは、バルク光学パルス圧縮器(あるいは低非線形性ブラック回折格子)あるいはパルス圧縮を周波数変換と結びつける周期的に色散分子の配向を揃えた(ボールした)非線形結晶を使用することで、光ファイバの高エネルギー特性を損なうことなく作られる。

【0020】ファイバパルス拡張器とバルク光学圧縮器での分散は、調整可能な2次、3次、4次分散をもつファイバパルス拡張器を組み込むことで、4分の1のオーダーの位相に適合される。調整可能な高次分散は、それ自身あるいは、線形チャープファイバ回折格子と台同して標準的な階段状屈折率分布(ステップインデックス)高開口数ファイバを使用することで最適化された屈折率分布をもつ高開口数単一モードファイバを使って、得られる。あるいは、高次分散は、高開口数の散モードファイバでの高次モードの分散特性を使用するか、透過

13

型ファイバ回折格子と台同して非線形チャープファイバ回折格子あるいは線形チャープファイバ回折格子を使用することで、制御される。調整可能な4次分散は、ファイバブラッグ回折格子、透過型ファイバ回折格子のチャープを制御し、且つ異なる割合の2次、3次、4次分散をもつファイバを使用することで、得られる。同様に、高次分散は、周期的にホールした非線形結晶を使用することで得られる。

【0021】ファイバ増幅器は、好ましくは短パルスファイバ光源の形をした短パルスレーザ光源でシードされる。Ybファイバ増幅器の場合、ラマンシフトした周波数短パルスErファイバレーザ光源が、広波長可変シード光源として、実装される。1.5 μm から1.0 μm への周波数変換のノイズを最小にするために、Erファイバレーザパルス光源の自己-制限ラマンシフトが使われる。あるいは、非線形周波数変換プロセスのノイズは、自己-制限周波数変換を実施することで最小化される。通信結晶の同調曲線の中心波長は、ラマンシフトパルスの中心波長より短い。

【0022】ラマンシフトと周波数変換のプロセスは逆にすることも可能である。そこでは、Erファイバレーザは、最初に周波数短パルスで、その後800 nm前後の波長と、1 μm の波長体利用のシード光源をつくるためのより高い波長と、に対してソリトン-維持分散を与える最適化されたファイバで、ラマンシフトされる。

【0023】Yb増幅器用の低-復雑シード光源の代わりとして、モードロックYbファイバレーザが使用される。ファイバレーザは、強くチャープしたパルスを作るようにデザインされ、光学フィルタが、Yb増幅器用バンド幅限界に近いシードパルスを選定するために結合される。

【0024】放物線状パルスは、十分なファイバ長に沿って伝送されるので、そのパルスは、ファイバ光学通信システムにも使用される。このシステムでは、外部パルス光源で発生された放物線状パルスが伝送される。あるいは、放物線状パルスは、伝送プロセスでも発生される。後者のケースでは、伝送システムでの光学非線形性の有害な作用が、長い、分布型、正分散光増幅器を実装することで一般的に最小化される。そのような増幅器は、少なくとも10 kmの長さで10 dB/km以下の利得をもつ。増幅器当たりの全利得は、光学非線形性の有害な作用の最小化のための放物線状パルス形成の開始を活用するために、10 dBを超えるべきである。伝送ラインのチャープ精度は、ファイバ伝送線に沿ってと伝送線の端部にもチャープファイバブラッグ回折格子を使用することで、通常実施される。光学バンド幅フィルタが、伝送したパルスのバンド幅制御のために、さらに実装される。

【0025】光ファイバでの短パルスのラマンシフトに基づく波長可変パルス光源は、多くの応用、たとえば、

(8)

特開2002-118315

14

分光分析で有益である。しかしながら、電気通信システム用の波長可変ファイバラマン増幅器の製作にラマンシフトを応用することで、非常に魅力的な装置が作られる。この波長可変システムにおいて、ラマンシフトしたポンパルスは、可変波長範囲のためにラマン利得を与え、ポンパルスに関して赤にシフトされる。さらに、ラマン利得スペクトルの形状は、ラマンシフトしたポンパルスを変調することで、制御される

【0026】

【提出された実施例の詳細説明】発明の一般化されたシステム図が、図1に示される。レーザシード光源1（シードモジュール；SM）で発生されたパルスは、パルス拡張モジュール2（PSM）に結合され、そこでパルスは、分散的に時間が拡張される。拡張されたパルスは、クラッドポンプされたYbファイバ増幅器3（増幅器モジュール、AM1）の基本モードに結合され、そこでパルスは、少なくとも10倍増幅される。最後に、パルスは、パルス圧縮器モジュール4（PCM）に結合され、そこではバンド幅限界近くまで時間的に圧縮される。

【0027】図1に示した実施例は、モジュール型で、4つのサブシステム；SM1、PSM2、AM13、PCM4、からなる。サブシステムは、別の実施例に記載されたように、異なる形状にはもちろん、個別でも使用される。

【0028】以下、議論はSM-PSM-AM1-PCMシステムに関連する。SM1は、好ましくはフェムト秒パルス光源（シード光源5）を有する。PSMは、好ましくは一本のファイバ6を有し、SMとPSMの間の結合は、好ましくは融着で行われる。PSMの出力は、好ましくはAM1モジュール3の内部のYb増幅器7の基本モードに注入される。結合は、融着、ファイバ結合器、あるいはPSM2とファイバ増幅器7の間のバルク光学結像システム、で行われる。すべてのファイバは、好ましくは偏光保持型が選択される。PCM4は、好ましくは小型化の理由で、一つあるいは二つのバルク光学回折格子で形成される分散遅延ラインを有する。あるいは、多数のバルク光学プリズムやブラッグ回折格子がPCM4に使われる。PCM4への結合は、図1に単レンズ8で描写されているように、バルク光学レンズシステムで行われる。ファイバブラッグ回折格子を含むPCMの場合、ファイバビグテールがPCMへの結合に使われる。

【0029】フェムト秒レーザシード光源の一例として、ラマンシフト周波数変換Erファイバレーザが、図2のSM1内に示されている。フェムト秒レーザ9は、波長1.57 μm で200 fsパルス、繰り返し周期50 Hzで1 nJのパルスエネルギーを供給する市販の高エネルギーソリトン光源（IBRA America, Inc., FemtoLite B-60TM）である。

【0030】1.5 μm から2.1 μm の波長領域への

15

最適なラマンシフトのために、偏光保持ラマンシフトファイバ10の長手方向にコア径(テーパ化した)を減らすことが行われる。コア径の減少は、1.5から2.1 μm までの全波長範囲でラマンシフトでの2次分散を零(しかし負)近くまで保つために必要とされる。2次分散の絶対値を小さく保つことで、ラマンシフト内のパルス幅が最小化され、このことは、ラマン周波数シフトの最大化をもたらす(J.P.Gordon, "Theory of the Soliton Self-frequency Shift," Opt. Lett., 11, 662(1986))。テーパ化なしでは、ラマン周波数シフトは、一般に2.00 μm 前後に制限され、この2.00 μm は、周波数通信後もYbファイバ増幅器の利得バンド幅と一致しない。

【0031】この特別の例では、それぞれ6 μm と4 μm のコア径をもつ30mと3mの長さのシリカラマンファイバ(1.56 μm で単一モード)からなる2段階ラマンシフト10が実装される。シリカの赤外吸収端の始まりが2.0 μm であることにより、ラマンシフト10の終端方向にテーパ化する率を増加することが有利である。現在の例では、1.57 μm から2.10 μm への変換効率25%以上が得られている。なめらかに変化するコア径をもつ、より多数のファイバを使うか、あるいはなめらかに変化するコア径をもつ単一のテーパ化ファイバを実装することで、よりよい変換効率を得られる。

【0032】ラマンシフトしたパルスの1.05 μm 領域への周波数変換は、適当に選定されたポーリング周相をもつ一本の周期的にポーリングしたLiNbO₃(PPLN)結晶11で行われる。(この仕様全てであるが、周波数変換用の好ましい材料は、PPLNのように必要であり、他の周期的にポーリングしたPPリチウムタンタレート、PP MgO:LiNbO₃、PP KTPのような強電性光学材料あるいはKTP異性同形体の周期的にポーリングした結晶も有利に使用されることが理解されるべきである。) PPLN結晶11との結合は、図2にレンズ12と示されたレンズシステムを使って行われる。PPLN結晶11の出力は、レンズ12で出力ファイバ13に結合される。1 μm の波長領域で40 pJ以上のパルスエネルギーをもたらす2.1 μm の周波数通信の場合、16%の変換効率を得られる。周波数変換されたパルスのスペクトル幅は、PPLN結晶11の長さの適当な選択で選定される、たとえば、13mmの長さのPPLN結晶は、約800 fsのパルス幅に対応する1.05 μm 領域での2 nmのバンド幅を生成する。発生されたパルス幅は、おおよそPPLN結晶の長さに比例する。すなわち、400 fsのパルス幅をもつ周波数変換されたパルスは、長さ6.5mmのPPLNを必要とする。このパルス幅縮小は、周波数変換されたパルス幅が、約100 fsに達するまで続けられ、ラマンシフトしたパルスの制限された100 fsのパルス幅は、さら

(9)

特開2002-118315

16

なるパルス幅の減少を制限する。

【0033】さらに、周波数変換されたパルス幅がラマンシフトしたパルスのパルス幅より十分長いとき、ラマンパルスの広いバンド幅は、周波数変換されたパルスの波長同調を可能にするために活用される。すなわち、有効な周波数変換は、周波数で2($\omega_1 - \delta\omega$)から2($\omega_1 + \delta\omega$)までのパルス範囲によって得られる。ここで、 $2\delta\omega$ は、ラマンシフトしたパルスのスペクトルの最大値の半分でのスペクトル幅である。ここでの連続波長同調は、周波数変換結晶11の温度を調節することで簡単に行われる。

【0034】ラマンシフト、PPLN結晶の組み合わせ、の増幅されたノイズは、次のように最小化される。Erファイバレーザパルス光源の自己制限ラマンシフトは、ラマンシフトをシリカベースの光ファイバでの2 μm より大きい方に拡張することで使用される。2 μm 以上の波長の場合、シリカの赤外吸収端がパルスを大きく減衰し始め、ラマンシフトの制限や増幅変動の減少をもたらす。すなわち、1.5 μm での増殖したパルスエネルギーは、より大きなラマンシフトや2 μm の波長領域でのより大きな吸収に移るのに役立つ。この増加は、したがってこの領域でのラマンシフトしたパルスの振幅を安定させる。

【0035】あるいは、非線形周波数変換プロセスのノイズは、自己制限周波数通信を行うことで最小化され、その場合、通信結晶の同調曲線の中心波長は、ラマンシフトしたパルスの中心波長より短い。再び、1.5 μm 領域での増加したパルスエネルギーは、より大きなラマンシフトに移り、減少した周波数変換効率を引き起こし、したがって、周波数通信したパルスの振幅が安定化される。したがって、一定の周波数変換されたパワーは、入力パワーの大きな変化に対して得られる。

【0036】これが図3に示されており、ここで、1 μm 波長領域での周波数変換された平均パワーが、1.56 μm での平均入力パワーの関数として示されている。自己制限周波数通信は、図3にも示すように、1 μm の波長領域での周波数シフトが1.56 μm の波長領域での平均入力パワーに依存しないということを確実にもする。

【0037】PSM2にはいくつかの選択できる物がある。図1に示すように、PSMとして一本のファイバ(並列ファイバ)が使用されるとき、システムからバンド幅限界に近いパルスを得るために、適当な分散遅延ラインがPCM4に使用される。しかしながら、PCM4の分散遅延ラインが、図4に示すようにバルクの回折格子14から構成されると、かなりの問題が生じる。2次と3次の比1/3/21次分散は、1 μm の波長領域で動作する典型的な階段状屈折率分布光ファイバでの2次と3次の比1/3/21次分散に比べて、回折格子型分散遅延ラインで1-30倍大きい。さらに、1 μm の波長領

(10)

特開2002-118315

17

域で動作する低開口数をもつ標準的な階段状屈折率分布ファイバの場合、ファイバでの3次分散の符号は回折格子型分散遅延ラインでの符号と同じである。このように、回折格子型拡張器と合同してファイバ拡張器は、システムでの3次および高次分散の補償のための予備手段にならない。

【0038】10倍以上のバルス拡張を行うためには、3次および高次分散の制御が、PCM4での最適なバルス圧縮に重要になる。この問題を打破するために、PSM2の拡張ファイバ6が、W状多クラッド屈折率分布をもつファイバ、すなわち、W-ファイバ（B.J.Ainslie et al.）あるいはホーリファイバ（T.M.Monroe et al., 'Holey Optical Fibers: An Efficient Modal Model', J.Lightw.Techn., vol.17, no.6, pp.1093-1102）と置き換えられる。W-ファイバとホーリファイバの両方は、2次、3次、および高次の分散の調整可能な値を許可する。Wおよびホーリファイバで可能な小さいコアサイズにより、標準的な単一モードファイバでの値より大きな3次分散の値が得られる。実際は、図1に示されているのに類似しており、別々には表示されない。そのようなシステムでの優位性は、PSMが純粋に透過型で動作することである。すなわち、PSMは反射型で動作する分散ブラッグ回折格子の使用を避け、異なるシステム構成のためにシステムの中および外に接続される。

【0039】2次、3次、および4次分散の調整可能な値をもつ別のPSM2が図5に示されている。PSM20aは、通常の階段状屈折率分布光ファイバが、正、ゼロ、あるいは、負いずれかの3次分散を作ることができるという原理に基づいている。ファイバでの最も高い3次分散の値は、ファイバの最初の高次モード、カットオフ近くのLP₁₁モード、を使うことで作られる。図5で、PSM20aの4次と3次分散は、バルス拡張ファイバの3区間15、16、17を使うことで調整される。最初の拡張ファイバ15は、ゼロの3次と適切な4次分散をもつ一本のファイバである。最初の拡張ファイバ15は、2番目の拡張ファイバ16に接続され、全チャープバルス増幅システムはもちろん、回折格子圧縮器の3次分散を補償するために選定される。LP₁₁モードの3次分散の優位性を確保するために、最初の拡張ファイバ15は、2番目の拡張ファイバ16と互いのファイバ中心でオフセットをもって接続され、2番目の拡張ファイバ16でのLP₁₁モードの主な励起をもたらす。2番目の拡張ファイバ16での3次分散の値を最大化するためには、高開口数NA>0.20をもつファイバが望ましい。3番目の拡張ファイバ17の基本モードの後にLP₁₁モードを伝播させるために、2番目の拡張ファイバ16の端部で、類似の接続技術が使われる。ファイバの適切な選定によって、全増幅器、圧縮器の4次分散が最小化される。3番目の拡張ファイバ17は、無視できる分散をもち、短くできる。

18

【0040】光学的なモード変換器の使用なしでLP₁₁モードからLP₀₁モードへのパワー伝搬を行うことで受ける避けられない50%あるいはそれ以上の損失により、全ファイバ拡張器アセンブリの伝搬損失は、少なくとも25%である。2番目の拡張ファイバのLP₀₁モードの残余のエネルギーは、図5に示すように、遅延できる反射型ファイバ格子18で反射される。基本モードと次の高次モードとの間の有効屈折率の大きな差により、二つのモード間で回折格子共振波長が10-40nmの間変化し、10-40nmの間のスペクトル幅をもつバルスのために一方のモードを他方に対して選択的に排除することを許可する。

【0041】ファイバ拡張器アセンブリのエネルギー損失は、3番目の拡張ファイバ17をYb増幅器に同調させることで、小さくされる。この真実は、別々に示されない。

【0042】4次分散が大きくないとき、最初の拡張ファイバ15は取り除かれる。3次と4次分散が最初と2番目の拡張ファイバの間で異なりさえすれば、4次分散もゼロでない3次分散をもつ最初の拡張ファイバを使用することで、補償される。

【0043】AM13の内部のYb添加ファイバは、Yb添加レベルが2.5モル%で、長さが5mである。単一モードおよび多モード両方のYb添加ファイバが使用され、出力ビームの空間的品質を最適化するために、多モードファイバの場合基本モードが励起されるが、ファイバのコア径は、1-50μm間変えられる。必要とされる利得の値に依って、異なる長さのYb添加ファイバが使用される。最も高い可能なバルスエネルギーを発生させるために、長さ1mのYbファイバが実装される。

【0044】バルス圧縮は、PCM4で行われる。PCM4は、通常のバルク光学部品（図4に示すバルク回折格子対のような）、単一回折格子圧縮器、あるいは、多数の分散プリズムやその他の分散遅延ラインを含む。

【0045】あるいは、ファイバやバルクブラッグ回折格子あるいはチャープした周期的にボールした結晶が使用される。チャープした周期的にボールした結晶は、バルス圧縮と周波数変換の機能を結びつけ（A.Galvanaskas, et al., 'Use of chirped quasi-phase matched materials in chirped pulse amplification systems' U.S. Application No.08/822,967, その内容は、ここに参考文献で具体化されている）、独自のコンパクトなシステムのために伝搬供給するように動作する。

【0046】本発明に対する他の変更や修正は、これまでの開示や教示からの技術に熟練したものに明白である。

【0047】特に、SM1は、周波数領域1.52-2.2μmのバンド幅近くに限定されたフェムト秒バルスを作るための自立ユニットとして使われ、非線形結晶での周波数変換後に周波数領域760nm-1.1μm

19

のパルスを作るのにも使われる。周波数領域は、フッ化ラマンシフトファイバあるいはシリカより長い赤外吸収端をもつ他の光ファイバを使うことでさらに拡大される。この技術を使って、約3-5 μm 以上の波長が達成される。周波数通信と共に、760nmから5000nmまでの連続調整が達成される。2 μm 領域のパルスパワーは、TmあるいはHo添加ファイバを使うことで、さらに高められる。そのような増幅器で、バンド幅限界近くの10nJを超えるパルスエネルギーをもつラマンソリトンパルスが、2 μm の波長領域の単一モードファイバに供給される。周波数通信後、数nJのエネルギーをもつフェムト秒パルスが、分散パルス圧縮器の使用なしで、1 μm 領域で得られる。そのようなパルスは、大きなコアの多モードYb増幅器のために高エネルギーシードパルスとして使用され、多モードYb増幅器は、増幅された自然放出を抑えるために単一モードYb増幅器より高いシードパルスエネルギーを必要とする。

【0048】シリカラマンシフト20、Tm添加増幅器21および第2のフッ化ガラスベースラマンシフト22をもつErファイバレーザパルス光源19と組み合わせる超広波長可変ファイバ光源の一例が図6のSM1cに示されている。選択できる周波数通信器は示されていない；最適な安定性のために、全てのファイバは偏光保持でなければならない。Erファイバレーザパルス光源に代わる別のものとして、Er増幅器をもつダイオードレーザパルス光源の組合せが使われる；これは分離して示されない。

【0049】SMの別の代わりとして、SM1dが図7に示されており、ラマンシフトホーリファイバ24と共同して周波数通信高パワー受動型モードロックErあるいはEr/Ybファイバ共振器23を有する。ここで、1.55 μm の波長領域で動作する共振器23からのパルスは、周波数通信器25とレンズ系26を使って最初に周波数通信され、その後周波数通信されたパルスは、750nm以上の波長あるいは少なくとも810nm以上の波長に対してソリトン維持分散を与えるホーリファイバ24でラマンシフトされる。1 μm 波長帯あるいは1.3、1.5、2 μm 波長帯でラマンシフトしたパルスを増幅し、且つ異なるデザインのラマンシフトファイバを遷定することで、波長領域が約750nmから5000nmの間で動作する連続的に可変な光源が作られる。多数の付属増幅器27をもつそのような光源のデザインも図7に示されている。

【0050】最適なラマン自己一周波数シフトのために、ホーリファイバ分散が、波長の関数として最適化されなければならない。ホーリファイバの3次分散の絶対値は、シリカの3次材料分散の絶対値以下か、あるいは等しくなければならない。これは、2次分散の値が負でなければならない。2次分散ゼロがシード入力波長で300nm以内でなければならないからである。

(11)

特開2002-118315

20

【0051】Yb増幅器用シード光源の別の代替物として、反ストークスファイバでの反ストークス発生が使用される。反ストークス発生後、広い波長可変光源を作るために、付加的長さのファイバ増幅器とラマンシフトが使用される。一般的な構成は、図7に示されているものに類似している。ここで、周波数通信手段25は省略され、ラマンシフト手段24は反ストークス発生手段と置き換えられる。たとえば、1.55 μm で動作するErファイバレーザシード光源を使った反ストークス発生手段で1.05 μm 波長帯の光を効率よく発生するためには、小さいコアと低い値の3次分散をもつ光ファイバの形をした反ストークス発生手段が最適である。3次分散の低い値は、ここでは、1.55 μm 波長領域での標準的な電子通信ファイバの3次分散の値に比べて小さい3次分散の値と定義される。さらに、反ストークスファイバの2次分散の値は、負でなければならないYb増幅器の別の代替シード光源として、受動モードロックYbあるいはNdファイバレーザがSM内部に使用される。好ましくは、負分散で動作するYbソリトン共振器が使用される。Ybソリトン共振器を作るために、図8に示すように、出力ファイバ36に接続されたチャープファイバ格子29によって負共振器分散が共振器内に導入される；あるいは、ホーリファイバ(T.McNroe, et al)のような負分散ファイバがYbソリトンレーザ共振器に使用される。そのような配列を具体化するSMが、図8中に1eとして示されている。ここで、Ybファイバ30は、偏光保持で、偏光子31がファイバ（結合がレンズ32で達成されている）の一つの軸に沿う発振を導くために組み入れられる。簡単のために、Ybファイバ30は、図8に示すように、側方からクラッドポンプされる。しかしながら、通常の単一モードファイバを組み入れる受動モードロックYbファイバレーザも使われる。そのような配列は別々に示されていない。回折格子35は、分散制御のために使用され、また、内部共振器ミラーとして使用される。ポンプダイオード33は、V溝34を通してポンプ光を供給する。

【0052】ホーリファイバを組み入れる配列は図8に示したシステムとほとんど同じであり、ここで付加的なホーリファイバは共振器のどこかに接続される。ホーリファイバを組み入れる場合、ファイバブラック回折格子は負分散をもつために不要であり、同様にブラック回折格子は誘導体ミラーで置き換えられる。

【0053】実施するのに最も簡単なものは、しかしながら、正分散で動作するYb共振器であり、それは、共振器分散を制御するために負分散ファイバブラック回折格子あるいは、ホーリファイバのような特別な共振器要素を必要としない。放物線状Yb増幅器（あるいは通常のYb増幅器）と共に、高パワーYb増幅器システムのための非常にコンパクトなシード光源が得られる。Yb増幅器40をもつそのようなYb共振器が図9に示

(12)

特開2002-118315

21

されており、ここで、好ましくは、Yb増幅器40は後に議論するような放物線状Yb増幅器である。図8中と同じ要素には同じ番号が付与されている。

【0054】図9の中のSM1fは、図8に関して記述されたような側方ポンプYb増幅器40を有するが、他のポンピング配列も実装されている。Ybファイバ44は、当然偏光保持で、偏光子31が単一の偏光状態を選ぶために挿入される。ファイバブラッグ回折格子37は、Ybの利得バンド幅に比べ小さな反射バンド幅をもち、Ybの利得バンド幅に比べ小さなバンド幅をもつパルスの発振を確実にする。ブラッグ回折格子37はチャープされるか、あるいはチャープされない。チャープされないブラッグ回折格子の場合、Yb増幅器内で発振するパルスは、正にチャープされる。Yb増幅器内でのパルス発生あるいは受動モードロックは、過飽和吸収体28で始められる。光ファイバ39は付加的で、Yb増幅器40に送り出されたパルスのバンド幅をさらに制限する。

【0055】SM1f内のYb増幅器40内の放物線状パルスの形成を最適化するために、入力パルスはYbの利得バンド幅に比べ小さいバンド幅をもつべきである；またYb増幅器40への入力パルス幅は、出力パルス幅に比べ小さくなければならぬし、Yb増幅器40の利得はできるだけ高く、すなわち、10以上でなければならぬ。また、Yb増幅器40内の利得飽和は小さくなければならない。

【0056】放物線状増幅器の一例として、長さ5mのYb増幅器が使用される。放物線状パルスの形成は、約0.2-1psのパルス幅と3-8nmのスペクトルバンド幅をもつシード光源を使用することで確実に行われる。放物線状パルスの形成は、Yb増幅器40内でシード光源のバンド幅を約20-30nmまで広げるが、出力パルスは、約2-3psに広げられる。放物線状パルス内でのチャープが高度に線形であるので、圧縮後に100fsオーダーのパルス幅が得られる。標準的な超高速固体増幅器が自己位相変調からの非線形位相シフトを p_1 （最近の技術で良く知られた）と同じ大きさだけ許すので、放物線状パルスファイバ増幅器は、10* p_1 およびそれ以上の大きさの非線形位相シフトを許すことができる。簡単のために、我々はYb増幅器を放物線状増幅器と呼ぶ。放物線状増幅器は単純な縮尺則に従い、増幅器長を適当に増やすことで、1nmあるいはそれ以下のスペクトルバンド幅をもつ放物線状パルスの発生を可能にする。たとえば、約2nmのスペクトルバンド幅をもつ放物線状パルスが、約100mの長さの放物線状増幅器を使用することで発生される。

【0057】放物線状パルスが自己変調の大きな値と、パルスの中断を招くことなしのスペクトル拡張の大きな値とを許すことができるので、放物線状増幅器のピークパワー飽和は、標準的な増幅器に比べ大きく高められる。

22

これは次のように説明される。長さLの光ファイバでの自己位相変調で受けた時間依存位相遅れ $\phi_{nl}(t)$ はピークパワーに比例する。すなわち、

$$\phi_{nl}(t) = \gamma P(t)L.$$

ここで、 $P(t)$ は光パルス内での時間依存ピークパワーである。周波数変調は位相変調の導関数で与えられ、すなわち、 $\delta\omega = \gamma L [\partial P(t) / \partial t]$ 。放物線状パルスプロファイル $P(t) = P_0 [1 - (t/t_0)^2]$ 、ここで、 $(-t_0 < t < t_0)$ の場合、周波数変調は線形である。それで、真にパルスプロファイルも放物線状のままであり、線形周波数変調だけをもつ大きなピークパワーの発生と線形パルスチャープの発生とを可能にすることが、示されている。

【0058】Yb増幅器40で発生されたチャープパルスは、図4に示すような回折格子圧縮器を使って圧縮される。あるいは、チャープした周期的にボールした結晶42とレンズ41が、図9に示されるように、パルス圧縮のために使われる。図9に示すSM1fに関連して、約530nmのグリーンスペクトル領域でのフェムト秒パルスを出す非常にコンパクトな自立光源が得られる。

【0059】図9に示す受動モードロックYbファイバレーザ44のほかに、Yb増幅器にシードするために別の光源も使われる。これら別の光源は、ラマンシフトErあるいはEr/Ybファイバレーザ、周波数シフトTmあるいはHoファイバレーザおよび、ダイオードレーザパルス光源を有する。これら別の実装物は別々に示されない。

【0060】図10でファイバ供給モジュール(FDM)45が図1に示す基本システムに加えられる。この場合PSM2は除かれる；しかしながら、増幅モジュールのピークパワー飽和を高めるためにPSM2は必要とき含まれる。図10に示すYb増幅器7は非放物線状、放物線状の両方で動作できる。

【0061】最も簡単な構成では、FDM45が一本の光ファイバ46（供給ファイバ）からなる。放物線状増幅器の場合、供給ファイバ46はパルス品質での損失を招くことなくYb増幅器7に直接接続される。むしろ、放物線状パルスプロファイルにより、沢山の自己位相変調の場合でも、PCM4でのさらなるパルス圧縮を可能にするパルスに近似的に線形なチャープが付加される。PCM4は、図4に示す小寸法バルク回折格子圧縮器14を使って供給ファイバと共にFDM45に集積化される。この場合、適当なコリメートレンズと接続する供給ファイバは、図4に示す入力と置き換えられる。そのような実施の別々の図は示されていない。しかしながら、PCM4の使用は付随的で、たとえば、チャープ出力パルスがシステムから要求されるなら、省かれる。PCM4と共に、図10に記載されたシステムは、派生的なチャープパルス増幅システムを構成し、ここで、パルスが時間に関して分散的に広げられる間、利得はもちろん自己

23

位相変調も加えられる。通常のチャープパルス増幅システムに自己位相変調を付加することは、一般的にパルス圧縮後に大きなパルス変形をもたらす。放物線状パルスの使用はこの制限を打破する。

【0062】次世代ファイバ光通信システムは、チャープパルス増幅システムと解釈される（たとえば、D.J. Jones et al., IEEE Trans. Electron., E81-C, 180 (1998)参照）。明らかに、放物線状パルスによるパルス変形の最小化は、光通信システムに等しく関連する。

【0063】50 fsより短いパルス幅を得るためには、FDMモジュールあるいは光PSM内の3次および高次の分散の制御が重要になる。PSMでの高次分散の制御は、図1と5に関連して既に議論された；FDMの高次分散の制御は、非常に類似しており、図11に示すFDM45aの模範的な実施例で議論される。図1に丁度示すように、大きな3次分散のW-ファイババルクPCM4の3次分散を補償するために使用される。図5に丁度示すように、FDMの高次分散に対して異なる値をもつファイバ15、16、17を使うことで、バルク回折格子を有するPCM4を含む全システムの高次分散が補償される。

【0064】PSMの別の実施例が図12及び図13に示されており、それらはPSMに市場で入手できる線形チャープファイバブラッグ回折格子を使用できるようにするような実質的な同じ値をもち、PCMもPSMも有する全チャープパルス増幅システムの高次分散を補償する。別の代替物として、非線形チャープファイバブラッグ回折格子もPCMの分散を補償するためにPSMに使用される。そのような配列は分離して示されていない。

【0065】W-ファイバの使用あるいはPSMでのLP₁₁モードを選ぶために、図12に示すようなPSMの別の実施例がPSM2bとして示されている。ここで負の線形チャープブラッグ回折格子47が、負の3次分散をもつ単一モード拡張ファイバ48とサーキュレータ49と接続して使用される。負の線形チャープブラッグ回折格子の導入は、PSM2bでの比（3次/2次）分散を増大させ、バルク回折格子圧縮器が使用されるとき、PCM4での3次分散の高い値の補償を可能にする。PSM2bは、PSMの複雑さをさらに改善するために線形チャープファイバブラッグ回折格子と接続したW-ファイバを含むこともできる。

【0066】高次分散補償用PSMの別の実施例として、図13に配列がPSM2cとして示されており、それは、正の線形チャープファイバブラッグ回折格子49、サーキュレータ50、および別のファイバ透過型回折格子51を有する。ここで、PCMモジュール内の線形および高次分散を補償するために、正の線形チャープファイバブラッグ回折格子49は、正の2次分散を作り、他のファイバ透過型回折格子51は、適当な値の付加的な2次、3次、4次分散を作る。一つ以上のファイ

(13)

特開2002-118315

24

バ透過型回折格子あるいはファイバブラッグ回折格子が、3次、4次およびできればより高次の分散の適当な値を得るために使用される。

【0067】Yb増幅器からの増幅されたパルスエネルギーをmJのオーダーおよびそれ以上まで増大させるために、パルス採集素子とさらなる増幅段が図14に示すように実装される。この場合、パルス採集器52は最初の増幅段AM1 3aと2番目の増幅段AM2 3bの間と、PSM2と最初の増幅モジュールAM1 3aの間とに挿入される。任意の数の増幅器とパルス採集器が、最も高い可能な出力パワーを得るために使われ、ここで、最後の増幅段は好ましくは、多モードファイバからなる。回折限界出力を得るために、多モード増幅器の基本モードが選択的に励起され、よく知られた技術(M.E. Fermann et al., United States Patent, No. 5,818,630)を使ってガイドされる。パルス採集器52は、一時的に音響-光学あるいは電気-光学変調器のような光変調器からなるように選択される。パルス採集器52は、SMから出てくるパルスの繰り返し周波数を与えられた値（たとえば、50 MHzから5 KHzへ）だけ低下させ、平均パワーは小さいままで非常に高いパルスエネルギーの発生を可能にする。あるいは、直接スイッチできる半導体レーザも、システムの繰り返し周波数を任意の値に固定するために使用される。さらに、後方の増幅器段に挿入されたパルス採集器52も増幅器での増幅された自然放出の増強を抑え、高エネルギー超短パルスに出力パワーを集中させることを可能にする。増幅段は、以前議論したようなPSMやPCMと合致しており、ここでは、全システムの分散がシステムの出力で最も短い可能なパルスを得るために最小化される。

【0068】増幅器モジュールAM1 3aは、放物線状スペクトルをもつパルスを生成する放物線状増幅器のようにデザインされる。同様に、AM1 3aからの放物線状パルスは、図14にも示されるようなパルス成形あるいはパルス拡張ファイバ53で放物線状パルススペクトルをもつパルスに変換され、ここで、自己位相変調と正分散の相互作用がこの変換をうまく行う。これは理解されるであろう、なぜなら、放物線状パルスプロファイルをもつチャープパルスが一本のファイバ中で放物線状スペクトルをもつ放物線状パルスに進化することができからである。放物線状パルス形状は、次の増幅段でかなりの自己位相変調の量を最大化し、順次に、PSM2とPCM4で必要とされる分散パルス拡張と圧縮の量を最小化する。同様に、放物線状パルス形状は、大きなパルス変形なしに、PSM2での十分な量の自己位相変調を許容することを認める。

【0069】一度パルスが拡張されると、次の増幅器での自己位相変調の有害な影響は、平らなパルス形状を使うことで最小化される。平らなパルス形状は、平らなパルススペクトルを生成するために、図14に示すような

50

25

光振幅フィルタ54を最後の増幅モジュールの前に挿入することで生成される、平らなスペクトルは、十分なパルス拡張の後、本当に平らなパルスに変換される、なぜなら、十分なパルス拡張の後のスペクトル含有量と時間遅れの間には直接の関連があるからである。自己位相変調の値が 10π と同じ大きさでも、大きなパルス変形を招くことなく平らなパルス形状に対して許容される。

【0070】図14に示すような振幅フィルタも、増幅器でのパルススペクトルの再形成が無視できるとき、すなわち、放物線状パルスが発生される体制の外側に、自己位相変調で強くチャープしたパルスに対する増幅器チェーンでの高次分散を制御するために使用される。この場合、自己位相変調は、かなりの量の式で表される高次分散を生成する：

$$\beta_n'''' = r P_0 L_{eff} [d^4 S(\omega) / d\omega^4] \omega_0.$$

ここで、 P_0 はパルスのピークパワーであり、 $S(\omega)$ は規格化されたパルススペクトルである。 L_{eff} は有効非線形長で、 $L_{eff} = [exp(gL) - 1] / g$ 、ここで、 L は増幅器長で、 g は単位長さ当たりの増幅器利得である。したがって、図14に示すような振幅フィルタで強くチャープしたパルスのスペクトルを正確に制御することで、任意の量の高次分散がチャープパルス増幅システムでの高次分散の値を補償するために導入される。それは、約1nsに拡張した500fsパルスに対して本当に示された、 $\sim 10\pi$ の位相シフトは、1800本/mmの溝をもつバルク格子からなるバルク圧縮器（図4に示すような）の3次分散を補償するために十分である。魅力的な制御性のよい振幅フィルタは、たとえば、ファイバ透過型回折格子であるが、任意の振幅フィルタが、パルススペクトルを制御するために、高次分散を引き起こす増幅器の前に使用される。

【0071】パルス採集器をもつ増幅器モジュールの組合せに対する別の実施例として、図15に示す構成が使用される。非常に高いエネルギーのパルスは、それらの増幅のために大きなコアの多モードファイバを必要とするので、シングルパスの偏光保持ファイバ増幅器で基本モードを制御することは困難である。この場合モード結合を最小化するためと高品質の出力ビームを得るために、高度に中心対称の非偏光保持ファイバ増幅器を使うことが好ましい。そのような増幅器から決定論的な環境に対して安定な偏光を得るために、図15に示すようなダブルパス構成が要求される。ここで、単一モードファイバ55が増幅器56の最初のパスの後に空間モードフィルタとして使用される；あるいは、ここに開口が使用される。空間モードフィルタ55は、多モード増幅器56の最初のパスの後のモードを橋渡しし、多モード増幅器の達成可能な利得を制限しがちな高次モードの増幅された自然放出を抑える。レンズ60は、増幅器56の中と外に空間モードフィルタ55、およびパルス採集器

(14)

特開2002-118315

26

52a、52bを結合するために使用される。ファラデー回転子57は、後方伝搬光が前方伝搬光と直交するように偏光されることを確実にし、後方伝搬光は、図示した偏光ビームスプリッタ58でシステムの外に出される。システムの効率を最適化するために、システムの入力部で多モードファイバ56の基本モードに回折限界近い光源が結合され、ここで、利得ガイドが多モードファイバで増幅されたビームの空間的品質をさらに改善するために使用される。SMから供給されるパルス列の繰り返し周期を小さくするためと多モード増幅器での増幅された自然放出を抑えるために、第1光変調器52aが多モード増幅器の最初のパスの後に挿入される。理想的な場所は図示するように反射ミラー59の前である。結果として、60-70dBの大きさのダブルパス利得がそのような構成で得られ、pJエネルギーをもつシードパルスをmJエネルギーレベルまで増幅することから要求される増幅段の数を最小化する。この種の増幅器は、以前議論したようなSM₂、PSM₂およびPCM₂と完全に合致し、mJのエネルギーをもつフェムト秒パルスの発生を可能にする。高利得増幅器モジュール構築の別の代替物として、SMで供給されるパルス列の繰り返し周期を低下させることが、図15に示すような増幅器モジュールに注入する前に、付加的な第2変調器52bで行われる。第1変調器52aの透過窓の繰り返し周期は、第2変調器52bの透過窓の繰り返し周期と同じかそれより低くなければならない。そのような構成は、別々には示されていない。図15は、ここに参考文献として添付された米国特許5,400,350の図5といくつかの類似性を共有する。

【0072】本発明の別の実施例として、長い分布回折率型正分散増幅器61での放物線状パルスの形成を使う光通信システムが図16に示されている。分散補償素子63が、ファイバ増幅器の間に挿入される。光学フィルタ62が増幅器でのパルス形成プロセスを最適化するために、さらに実装される。光フィルタは、繰り返し透過スペクトル特性をもつように、限定された自由スペクトル範囲をもつ光学エタロンに基づいており、波長分割多重で要求されるような多波長チャンネルの同時透過を可能にする。

【0073】キーとなる利便なことは、ファイバ透過システムの光カー非線形性で導入されるチャープを線形化するために、長い正分散ファイバの大きな利得を組合せることである。したがって、一般に、光通信システムの透過特性は、正分散（非ソリトン支持）増幅器を実装することで、改善される。そのような増幅器は、少なくとも10Kmの長さを持ち、10dB/Km以下の利得をもつ。光学非線形性の有害な効果を最小化するための放物線状パルス形成の始まりを利用するために、増幅器当たりの総利得は10dBを超えることができる。さらなる改善は、3dB/Km以下の利得を持ち、総利得

(15)

特開2002-118315

27

が20dB以上であるように全長を長くした増幅器を使うことで増進される。ファイバ透過ラインの透過特性のさらなる改善は、ファイバ透過ラインの負分散素子のカー非線形性の量を最小化することで得られる。これは負分散素子のためにチャープファイバ回折格子を使用することで達成される。

【0074】透過ラインでの放物線状パルスの形成に加えて、外部光源で放物線状パルスを生じさせること、そしてそれらを非ソリトン支持増幅器ファイバに注入することも有利である。そのようなシステムを有効に使用するために、ホーリファイバで可能にされた低損失分散透過が有益である。ファイバ透過ラインに沿ってファイバ透過ライン端とに分散補償素子が実装される。そのようなシステムの実施は、図16に示すものに類似しており、別々に示されていない。上述のような類似のラインに沿ってデザインされた光通信システムは、ここに参考文献として添付された暫定出願No. 000000に開示されている。

【0075】電気通信領域における本発明の別の実施例として、波長可変ラマン増幅器がラマンシフトパルスを使って構築される。与えられたポンプ波長の高パワー光信号がポンプ波長に関してレッドシフトした信号波長のラマン利得を作るということは、最近の技術でよく知られている。事実、それは、ここで議論された波長可変パルス光源の構築に使用されるポンプパルス自身に作用する効果である。

【0076】波長可変ラマン増幅器の一般的なデザインが図17に示されている。ここで、短い光パルスはシード光源で作られる。シードパルスは変調器65で光学的に変調され、光増幅器66で増幅される。シードパルスは次に一本のラマンシフトファイバ67に注入される。ラマンシフトファイバは一本のホーリファイバあるいはその他のデザインのファイバである。ラマンシフトパルス間の時間周期は、図17に示すようなパルス分割手段（ポンプパルス分割器）68を使って減少される。このパルス分割手段は、たとえば、不均衡なマッハツェンダ干渉計のアレイであるが、単一パルスからパルス列を発生させる任意の手段が受け入れられる。適当に波長シフトした増幅され変調されたシードパルスは、ラマン増幅器69に注入されるポンプパルスを含み、信号入力70で動作し、信号出力71を作るために、図17に示すように、ラマン増幅器で信号波長の光利得を発生する。

【0077】ラマン増幅器ファイバ内で、信号波長での光信号は、ラマン増幅器のポンプパルスと反対方向に伝搬する。いくつかの信号波長も信号結合器を使ってラマン増幅器に注入され、そのような増幅器を光波長分割多重に合致するようにする。たとえば、波長1470nmのポンプパルスは、シリカファイバ中で1560nmの波長領域近辺でのラマン利得を生成する。ラマン増幅器の利得を最適化するために、ホーリファイバあるいは相

28

対的に小さいファイバコアをもつその他のファイバが使用される。

【0078】ラマン利得が得られる波長の中心波長は、ポンプパルスの波長を同調することで同調される。ポンプパルスの波長同調は、ラマンシフトファイバ67に注入される前にシードパルスの幅とパワーとを変調することで達成される。

【0079】さらに、ラマン増幅器の利得スペクトルはポンプパルスの波長を高速に同調することで調整され、信号パルスは、有効に変更されたラマン利得スペクトルに合わされる。有効なラマン利得が時間に依存しないことを確かめるために、ポンプパルスを同調するスピード、すなわち、必要な波長範囲にわたってパルスを同調するのにかかる時間周期は、信号パルスがラマン増幅器ファイバ69を移動するのに要する時間に比べて小さくされなければならない。

【0080】このように、電気通信システムのラマン増幅器にとって、単一パルスからできる利得より広いスペクトル利得を得ることが有利である。異なる波長で伝搬される変化するデータ量を補償するために、WDM電気通信システムの利得を動的に変えることができることも有利である。スペクトル利得を広げる一つの方法は、通信ファイバを伝搬する時間に比べてポンプ波長を早く同調することである。利得は、ポンプが異なる波長でどまる時間を変えることで動的に調整される。利得スペクトルを調整する別の方法は、異なる波長ごとに大多数のポンプパルスをラマンシフトファイバに使用することである。各波長ごとに相対的な数のパルスを変調することは、相対的な利得プロファイルを変更することを可能にする。

【0081】より具体的に言うと、図1に示されたフェムト秒パルス光源は、高パワーのためにYb増幅器で増幅される。これらのパルスは、フェムト秒パルス光源の動作点より短い波長で零分散点をもつファイバで、1400-1500nm領域にラマン自己屈折率シフトされる。このファイバはホーリファイバでもよい。1400-1500nm領域にラマン自己屈折率シフトをもつワットレベルのパワーを達成するためには、光源の最速繰り返し周期が1GHz以上の高周波数であるべきである。利得スペクトル拡張と自動利得制御は、異なる量のラマンシフトを得るために、大多数のポンプ波長を使用することで、ポンプ波長を同調することで、あるいは、パルス列の個々のパルスのパルス幅を変調することで、得られる。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明に関する高ピーク、高平均パワー、超短レーザパルス発生用のモジュール化したコンパクトな波長可変システムの図である。

【図2】本発明に使用するためのシードモジュール（SM）の第一実施例の図である。

(16)

特開2002-118315

29

30

【図3】本発明の第一実施例に関する与えられた入力パワーで出力される平均周波数増倍パワーと波長の関係を示すグラフである。

【図4】本発明で使用するためのパルス圧縮器モジュール（PCM）の第一実施例の図である。

【図5】本発明で使用するためのパルス拡張器モジュール（PSM）の第一実施例の図である。

【図6】本発明で使用するためのシードモジュール（SM）の第二実施例の図である。

【図7】本発明で使用するためのシードモジュール（SM）の第三実施例の図である。

【図8】本発明で使用するためのシードモジュール（SM）の第四実施例の図である。

【図9】本発明で使用するためのシードモジュール（SM）の第五実施例の図である。

【図10】ファイバ分配モジュール（FDM）が、図1に示された本発明の実施例に付加された本発明の一実施

*例の図である。

【図11】本発明で使用するためのファイバ分配モジュール（FDM）の一実施例の図である。

【図12】本発明で使用するためのパルス拡張器モジュール（PSM）の第二実施例の図である。

【図13】本発明で使用するためのパルス拡張器の第三実施例の図である。

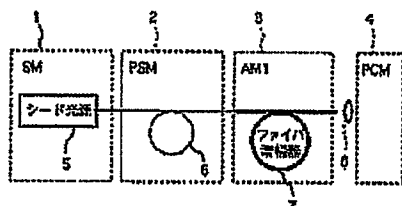
【図14】パルス採集素子と付加的増幅段が付加された本発明の一実施例の図である。

【図15】パルス採集素子のような光変調器と組み合わせてファイバ増幅器が少なくとも一つの前方バスと一つの後方バスで動作する本発明の別の実施例の図である。

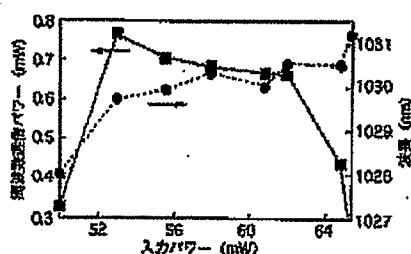
【図16】光通信の面における本発明の別の実施例の図である。

【図17】電気通信用波長可変ラマン増幅器の面における本システムの別の実施例の図である。

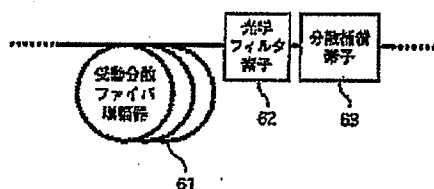
【図1】



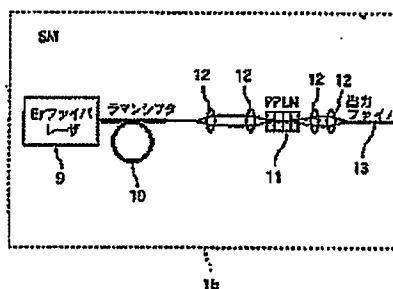
【図3】



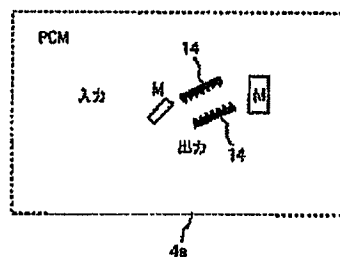
【図16】



【図2】

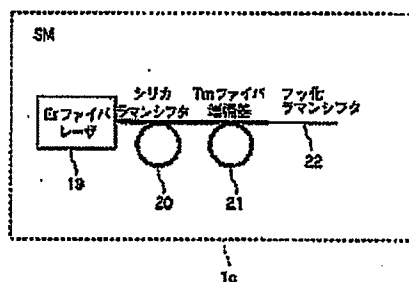


【図4】

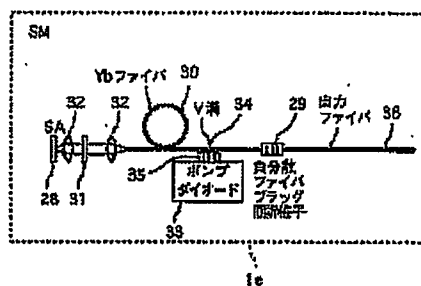


特開2002-118315

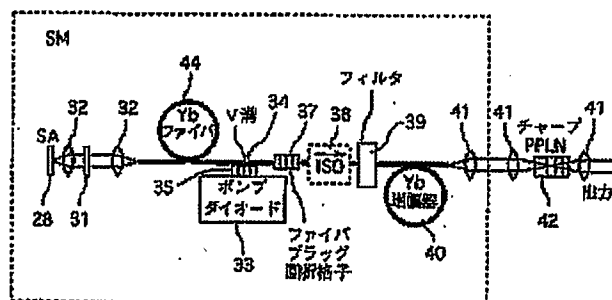
【図6】



【圖8】



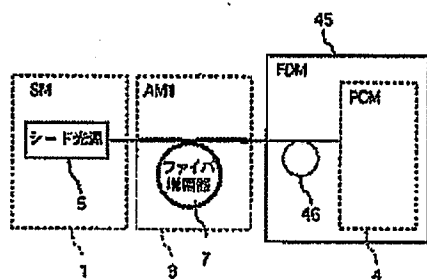
【圖9】



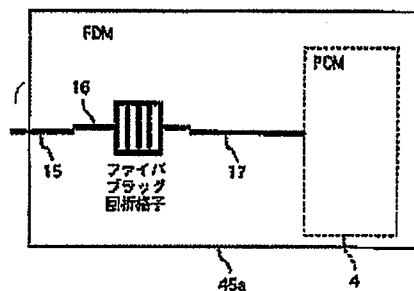
(18)

特開2002-118315

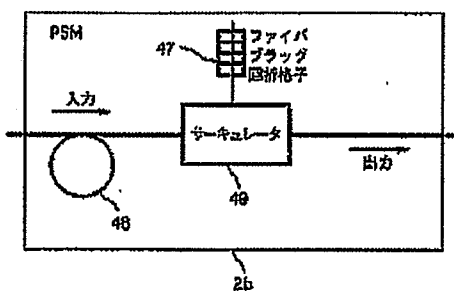
【図10】



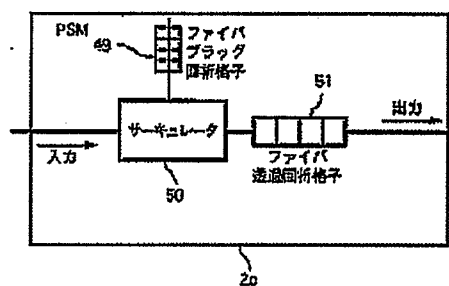
【図11】



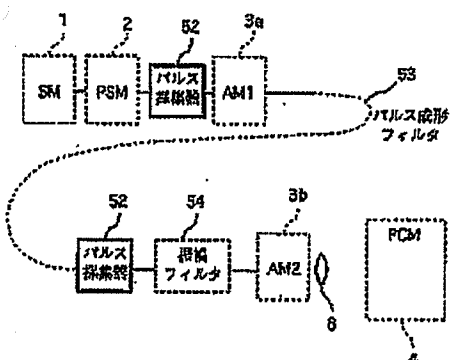
【図12】



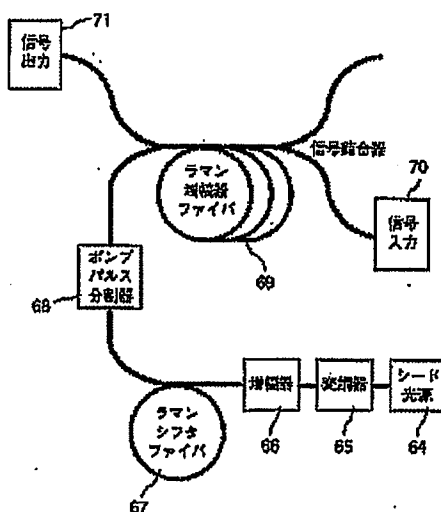
【図13】



【図14】

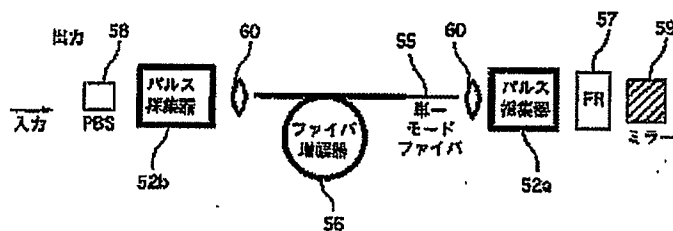


【図17】



特開2002-118315

【圖 15】



フロントページの続き

¹「フーゴート」(参考)

7

Fターム(参考)

2H050	AC81	AC83	AD09
2K002	AA02	AB12	AB30
	CA02	CA03	CA15
	DA10	EA07	
	EA30	HA20	HA24
5F072	AB07	AB08	AB09
	AB13	AK06	
	JJ01	JJ07	KK07
	KK12	KK30	
	QQ02	QQ07	RR01
	SS08	YY15	